

地域に求められるまちづくり会社として歩むために



一般社団法人ならはみらい

1. 檜葉町について

【人口】 8,011名 (2011年 3月11日時点)
6,982名 (2018年11月30日現在)

*町内居住者 3,599名 (2018年11月30日現在)
全人口の51.55%

【立地】 東側には太平洋/温暖な気候
第一原発から南に約20km
第二原発から南に約10km



【名物】

①木戸川の鮭



②ゆず (太郎) ③マミーすいとん



ゆず太郎 (檜葉町公式キャラクター)



【観光】

①Jヴィレッジ



②木戸川溪谷



③天神岬



【伝統文化】

- 大滝神社浜下り行事 (県無形文化財指定)



2-1. 震災発生

2011年
(震災発生)

2012年
(1年目)

2013年
(2年目)

2014年
(3年目)

2015年
(4年目)

2016年
(5年目)

2017年
(6年目)

東日本大震災発生 2011年3月11日 14時46分 (楡葉町 震度6強)

地震



楡葉中学校の地震被害の様子

津波



天神岬スポーツ公園から見た
津波襲来の様子

原発事故



3/11 16:36 福島第一原発
原子力緊急事態宣言

<被害状況>

死者 13名
重傷者 2名
住宅被害多数

<避難状況>

3月12日 いわき市へ全町避難
～15日 水素爆発(第1・3・4号機)
3月16日 会津美里町へ二次避難
4月22日 半径20km圏が警戒区域に
5月25日 借り上げ住宅入居開始
7月 1日 仮設住宅への入居開始
最終：いわき市13ヶ所
会津美里1ヶ所

複合災害

町民が全国各地へ避難



避難所の様子



一時帰宅の様子



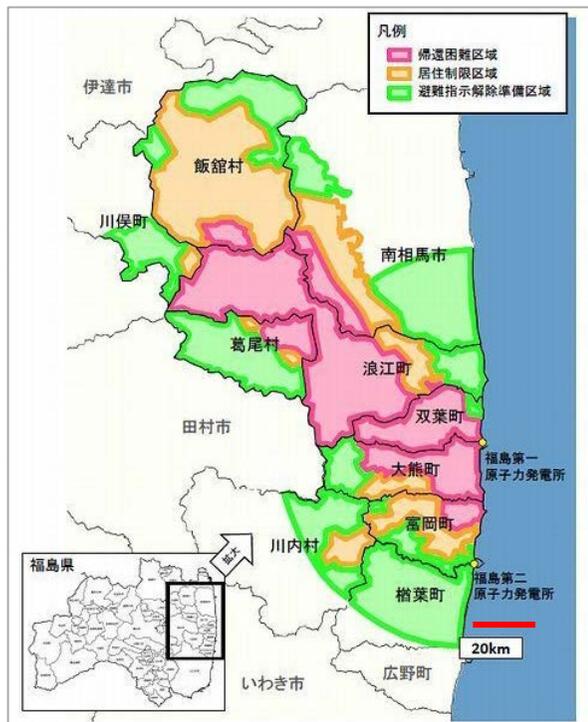
いわき市内の応急仮設住宅の様子

2-2. 震災後のあゆみ



2012年8月10日

警戒区域⇒避難指示解除準備区域に再編

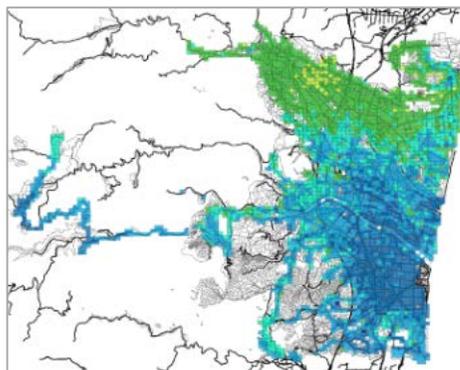


日中の立ち入り可能
宿泊は不可

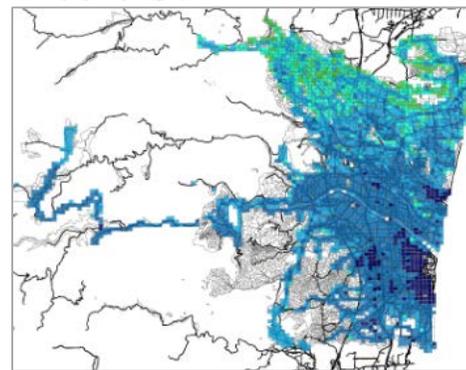
2013年度末

町内の住宅圏の除染が完了

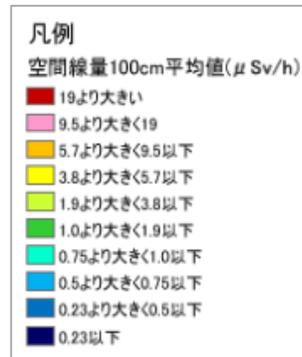
<除染前>



<除染後>



楡葉町内除染仮置き場



2-3. 震災後のあゆみ

2011年
(震災発生)

2012年
(1年目)

2013年
(2年目)

2014年
(3年目)

2015年
(4年目)

2016年
(5年目)

2017年
(6年目)



2014年6月1日 JR常磐線
広野駅～竜田駅(榎葉町)間の運転再開



2014年6月30日
一般社団法人ならはみらい設立
※ならはみらい概要は次項



2014年7月31日
仮設店舗「ここなら商店街」オープン

ならはみらいの業務内容

〈自宅再建業務〉

リフォーム業者や
住宅清掃業者と町民の
マッチング

〈放射線測定業務〉

- 飲料水モニタリング
- 個人線量計再配布

〈復興状況を知る〉

- 町民を対象とした
復興復旧状況を
確認するバスツアー

〈ならは応援団〉

双葉警察署員にマミー
すいとんを振舞い、
感謝を伝える

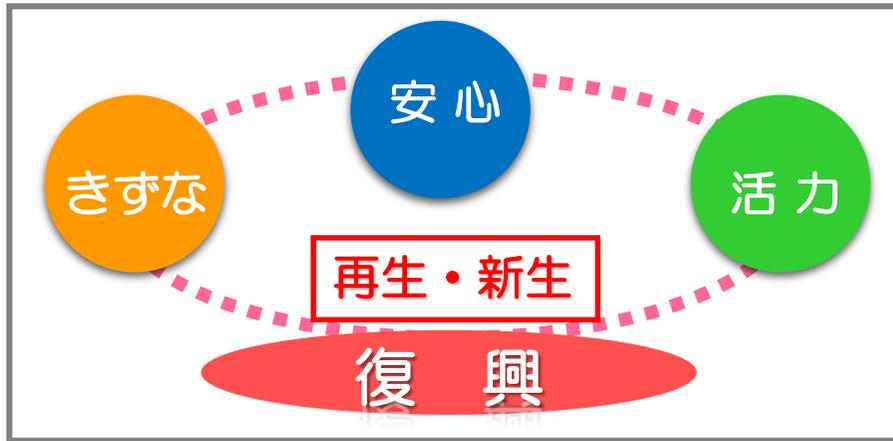
*ならはみらいの概要

【設立日】 平成26年6月30日（*1）設立の経緯は下部図を参照

【目的・役割】 檜葉町が魅力ある町として再生していくために以下の内容が不可欠である。

- ・ 町外からの応援や共感を得つつ、町民自身が主体的に関わるまちづくり
- ・ 復興需要を域内で循環・再投資するなどの仕組みづくり

◎ 「きずな」「安心」「活力」の再生・新生



- きずな**
 - ・ 町民同士のきずな
 - ・ 町内外の新たなきずな
- 安心**
 - ・ 生活再建への不安解消
 - ・ 放射能に対する不安解消
- 活力**
 - ・ 町民の生きがいづくり
 - ・ 地域内の経済再循環，再投資システムの構築

（*1）設立に至る経緯

平成24年	4月	・ 檜葉町復興計画<第一次>に設立検討が明記
	11月	・ まちづくり会社「ならは復興会社（仮）プロジェクトチーム」発足
平成25年	5月	・ 檜葉町復興計画<第二次>に中核プロジェクトとして記載
平成26年	2月	・ ならは復興まちづくり会社(仮称) 発起人会及び設立準備会発足 ・ 発起人会を開催
	6月	・ 設立総会開催 ・ 第1回理事会開催 ・ 設立登記申請

2-4. 震災後のあゆみ

2011年
(震災発生)

2012年
(1年目)

2013年
(2年目)

2014年
(3年目)

2015年
(4年目)

2016年
(5年目)

2017年
(6年目)

2015年9月5日(土) すべての避難指示が解除

復興へ向けた新たなスタートを決意する節目の日



ならはみらいの業務内容

檜葉町復興祈念式典・キャンドルナイトの様子

<仮設住宅見守り>

仮設住宅における戸別訪問及び施設管理業務

<ならは応援団>

- ・被災地間交流会
- ・花とみどりPJ
- ・31人の「生」の物語

<なにかし隊>

- ・町民によるアイデアを出し合うWSの実施・アイデアの実現をサポート

<視察受け入れ>

- ・町外からの視察(被災状況の説明や町内ガイド等)の受け入れ

2-5. 震災後のあゆみ

2011年
(震災発生)

2012年
(1年目)

2013年
(2年目)

2014年
(3年目)

2015年
(4年目)

2016年
(5年目)

2017年
(6年目)



2016年8月 盆楽祭
ほっつあれDEいいんかいっ?!



2016年10月 ならは米 初出荷



2016年2月
ふたば復興診療所オープン

ならはみらいの業務内容

<空き家空き地バンク>

「売りたい・貸したい」物件を町内で暮らしたい一般の方につなぐ

<交流人口拡大>

- スタディツアー実施
- みらいハウス運営 (ボランティア宿泊用)
- 町外での情報発信

<町民活動サポート>

- 藍染め
- かかしづくり
- なにかし隊

<ふるさと案内人>

- 町外からの視察や語り部の要望に応え、町民によるガイドを有料・制度化。

2-6. 震災後のあゆみ

2011年
(震災発生)

2012年
(1年目)

2013年
(2年目)

2014年
(3年目)

2015年
(4年目)

2016年
(5年目)

2017年
(6年目)



2017年4月 小中学校再開



2017年4月頃～ 公営住宅入居開始



2017年9月 中学生室立ち上げ

ならはみらいの業務内容

〈生活再建ｺｰﾙセンター〉

以下の内容の受付・
相談窓口の一本化

- ・空き家空き地バンク
- ・東京電力片づけ支援
- ・ハウスクリーニング

〈活性化協議会〉

町内15の企業団体の
連携を図ることを目的
とした協議会の立ち上
げと事務局を担う

〈生きがづくり〉

町民自身の「やりた
い!」という想いを
資金調達や広報等の面
でサポートする

〈交流人口拡大〉

町外からの来訪者を
増やし、継続的活動を
してもらい流れを構築
する。町民との協働に
より町民を巻き込む。

〈交流館建設/運営〉

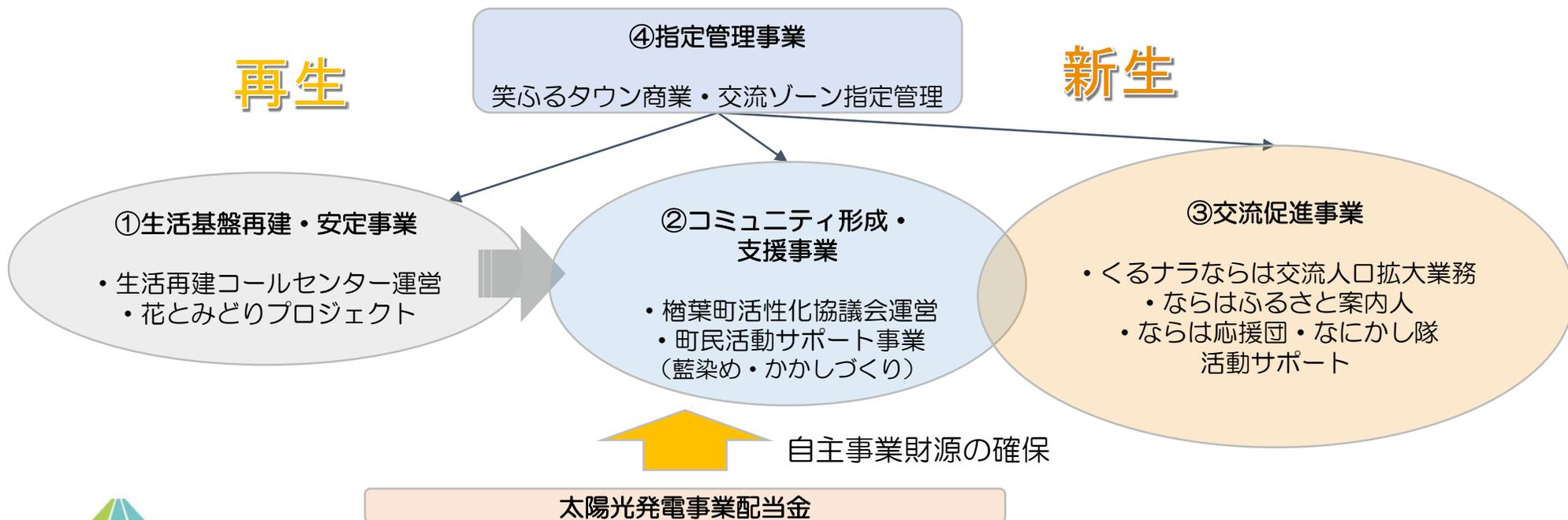
平成30年春オープ
ンの交流館(仮)の
建設のための町民
ワークショップへの
協力。

3. 平成30年度ならはみらい事業全体像

「きずな・安心・活力」を理念とし、

- 町民が安心して暮らせる生活基盤の再建・安定を図ること
- 町民及び町内団体間のコミュニケーションを促し、町民が生き生きと生活できるコミュニティを形成し、その成長を支援すること
- 町外との交流を深め町内へ新しい風を吹き込むことで、新たな絆やにぎわいを創出することを
①生活基盤再建・安定事業 ②コミュニティ形成・支援事業 ③交流促進事業 ④指定管理事業
の4事業を通して目指す。
- 榎葉新電力株式会社への投資による配当金受領が当社の財源となり、各事業における自主事業の展開を支える。

榎葉町民であることへの誇りを取り戻し、“シン”の復興を実現させる



4. 平成30年度の主な事業計画

1. 生活基盤再建・安定事業

(1) 生活再建コールセンター運営事業

(1-1) 檜葉町生活再建空き家・空き地バンク運営

町内の空き家・空き地情報を集約化し、利用希望者とマッチングする。

(1-2) 生活再建に係わる各種受付コールセンターの運営

東京電力が実施する屋内片付けや敷地内除草のほか、ハウスクリーニングの受付を行う。

(2) 花とみどりプロジェクト

町内の環境美化と行政区活動の再生を目的とした花植え活動の支援を行う。



2. コミュニティ形成・支援事業

(1) 檜葉町活性化協議会運営

町内の企業・団体の情報交換及び連携促進に加え、行事・講座をまとめたカレンダーを毎月発行する。



(2) 町民活動サポート事業（藍染め・かかしづくり等）

町民の「生きがい」「やりがい」の場の創出、新たなコミュニティの形成を目的に制作、展示等、活動をサポートする。



3. 交流促進事業

(1) くるナラならは交流人口拡大業務

(1-1) 大学・企業訪問、イベントブース出展

情報発信を行うことで檜葉町における継続的な活動を促進し、繋がりをつくる。

(1-2) スタディツアー

檜葉町を訪れる「きっかけ」をつくり、将来的には学生と町民による自主的な交流に繋げる。

(1-3) みらいハウス 運営・管理

町外ボランティアの活動拠点（宿泊施設）を整備し、継続的に関わる人口を増やす。



3. 交流促進事業

(2) ならはふるさと案内人

町民が案内人となり、東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故によって変わってしまった町の様子や復興に向けた取り組みを伝える。

<町内ガイド>

1～2時間かけて町内各所をめぐり、震災当時の様子や町の現状について説明する。

<語り部>

震災当時の様子や福島第一原子力発電所事故に関する体験を語る。

(3) ならは応援団・なにかし隊活動サポート

町内外ボランティアの継続的な活動をサポートするとともに、活動のマッチングを促す。



4. 指定管理事業

災害公営住宅や診療所、認定こども園など、さまざまな生活機能を集約したコンパクトタウン「笑ふるタウンならは」は、樫葉町の中心部に位置する新たな復興拠点です。平成30年6月末には、スーパーやホームセンター、飲食店や理容店など10店舗が入居する複合商業施設「ここなら笑店街」がオープン。7月末には、町民の思いをもとに設計された「みんなの交流館ならはCANvas」が誕生しました。ならはみらいは町から両施設の指定管理業務を受託し、施設利用の促進、テナント会の運営支援、イベントの開催等、「笑ふるタウン」のみにとどまらない樫葉町全体の賑わい創出に取り組んでいます。



ここなら笑店街

避難指示解除から町を支えてきた仮設店舗「ここなら笑店街」が、公設民営の複合商業施設として「笑ふるタウンならは」内に新装オープン。買い物だけでなく、町民の「笑顔」を生む憩いの場としての利用も期待されている。



みんなの交流館ならはCANvas

全9回のワークショップを通して町民の声を集め、施設への期待、思いを設計に盛り込んだ新たな交流拠点。「ここなら笑店街」に続き、「笑ふるタウンならは」内にオープンした。地域を超え、世代を超えて愛されることを願い、何度も来たくなるようなたくさんの魅力とこだわりが詰まった施設を目指している。

5. みんなの交流館ならはCANvasについて

みんなの交流館ならはCANvasに込められた、みんなの夢。
 ～<お茶飲み会>で語られた想いがかたちになりました～



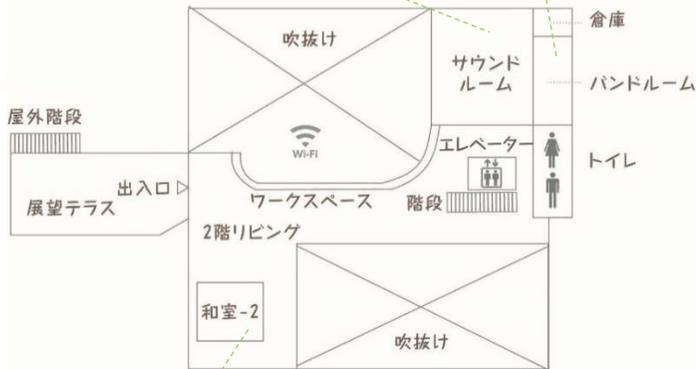
4つのコンセプト。

- 1 町内外、世代を超えて人が集い、出会い、交流する場
- 2 まちの目印、復興の象徴となる場
- 3 楡葉らしさ、情報、震災の記憶を発信する場
- 4 一人でも誰とでもゆっくりと過ごせる場

2F

音楽や映画を通じた新しい世界との出会い。

楽器を背負って自転車で走る、青春真っ只中の学生さんの姿を見たい！



ホトトギス山を見ながら仲間とお酒を飲みたいな。

木をたくさん使った温もりのある建物にして欲しい。

室内と室外を一緒に使えるといいな。

足つぽでみんな健康！

「また絵が変わってる！」行く度に変化があると人が集まるんじゃないかな。

餅つき大会や郷土料理を教えられる場所。

「俺見てっから買い物してこ〜！」昔みたいに、地域のお年寄りに見守られて子どもが育つきっかけの場所。

震災前みたいに、縁側で井戸端会議がしたい。

フリマや朝市ができる場所が欲しい。

4方向に出入り口があり、自由に通り抜ける。

1人でも気楽に来れるカフェのようなスペースが欲しい。

懐かしい人に会える場所。目的なく自然に人が集まる空間。

“交流”を生む工夫がいっぱい！ソファや組み換えてできる棚が。

南側は全面オープンして緑地広場と一体で使いたい。

縁側をステージに、広場を客席として。広場をステージに、縁側を客席にして。

ガラス張りで明るい誰でも入りやすい。



壁や間仕切りがなく、人の気配を感じる空間。



ロゴに込められた檜葉町の未来図



真っ白なキャンバス＝交流館を、檜葉の風景と光を表すストライプで囲みました。3色の緑は町を流れる川と太平洋、緑は自然豊かな山並み、赤は美しい夕焼けを表現しています。

また3色には、震災、全町避難、そして帰還を経て、**新たな道を歩む檜葉町の姿**も意味しています。

町に戻られた人

やむなく町を離れた人

新たに町に入ってきた人

この3原色の交わりで生まれた真っ白なキャンバスが、
住んでいる場所に関係なく、誰にとっても使いやすい“みんな”の施設であってほしい。
そして、キャンバスを通して生まれる新たな出会い、交流でキャンバスを彩ってほしい。
そんな願いが込められています。

6. 将来的な町民構成の推計から考えるまちづくり

■ 推計人口の区分

A. 震災前からの檜葉町民
〈帰町者〉

B. 檜葉町への新たな転入者
〈転入者〉

B-1. 避難指示が続く他町からの転入者

B-2. 新産業関連の転入者

檜葉町では平成27年度に実施した国勢調査をもとに「檜葉町まち・ひと・しごと創生総合戦略人口ビジョン」を策定。平成32年（2020年）の推計人口を①上位（最大）②中位（中間）③下位（最小）の3パターンで算出しました。

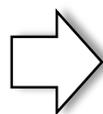
— 算出結果 —

上位 約6,100人

中位 約4,800人

下位 約3,800人

檜葉町では、町の公共施設等のストック、避難前人口などを考慮し、中位推計の約4,800人を確保しつつ、上位推計の6,100人を目指すとしています。



このうち転入者は、確保目標の中位の場合、B-1が約160人、B-2が約560人の計720人。町内における企業社宅の整備が進む現在、B-2の転入ニーズの高まりが想定されます。

一方で…

平成30年8月末現在、町内居住者の約47%が60歳以上の高齢者。この比率を中位推計の帰町者数（A-B）4,080人に当てはめると、平成32年における60歳以上の高齢者数は約1,920人に上ります。町の基盤強化には欠かせない生産年齢人口を確保するためには、新産業関連転入者の定着も必要不可欠と考えます。

7. さらなる“檜葉の未来づくり”に貢献するための成長を

創業期 2014年～2019年

公設交流ゾーン「笑ふるタウン」の開業と指定管理受託を通じたゾーンマネジメント主体としての役割の構築

+

持続的に活動する公設メガソーラー発電の稼働による自律的収益基盤の形成



長期レンジで持続的に活動する基盤の確保



成長期へ向けての事業計画の策定

⇒収益性と公益性、即効性と遅効性のバランス

基本理念「**きずな・安心・活力**」を構築するための触媒として掲げる重点テーマ

①町民生活の保全

②賑わいのあるまちづくり

③地域経済・産業の再興

町民・行政・笑店街出店事業者・町内一般事業者のニーズを集積し、課題解決へ導くプラットフォームの形成に向けて

✓新たなコミュニティをカタチに

⇒生活の基軸となる行政区活動の再生・新生

⇒コミュニティレベルに応じた目標設定とサポート

✓開業特需以降における集客・消費の持続化

⇒町民生活必需品を安定供給する複合商業施設の安定的運営

⇒数値的寄与度の明示（利用者満足度調査、消費額統計情報、来店数統計等）

✓一般事業者、地域経済産業再興に向けた触媒的役割

⇒地域商材の発掘と独自販路の構築

⇒新産業同士のビジネス連携支援

⇒クリーンエネルギー（地域エネルギー）のマネジメント

✓域内から域外へ 交流人口・関係人口形成に向けた施策

⇒スポーツコミッション連携、農業観光などのコンテンツの形成

⇒新住民を含めたまちづくり、新たなコミュニティの形成を目的とする懇話会等の開催

✓未来の「きずな・安心・活力」の基盤づくりへの寄与

⇒榎葉町の未来に対して責任を持てる人材の育成（インターンからUターンへ）

⇒空き家をリノベーションしての住宅供給・定住支援

ご清聴ありがとうございました

